

長屋のくらしと道具 ③

すずしく・あたたかく 長屋に住まろ

江東区深川江戸資料館



『絵本常盤草』中（享保15年=1730）刊行
こたつで読書する女性たち

8月24日に最高の36℃を記録した今年の夏。こんな日は、長屋の人たちはどうしていたのですかと来館者の方々から何度もたずねられました。

盛夏の暑さ、厳冬の寒さを和らげることのできる手段の確立は、人々の生活を飛躍的に快適にしました。

しかし、それは比較的近年のことです。それ以前、江戸時代の人々は、盛夏をどのように乗り切り、厳冬をどんな工夫で暖かくすごしたのでしょうか。ここでは、江戸の冷暖を演出したさまざまな道具たちを紹介していきます。

涼しく 夕涼み

涼をとる方法の代表は、「風を浴びる」こと。船で川に出る「すずみ」は、その最たるものといえるでしょう。

「納涼」と書いてすずみと読むのは、いかにも江戸らしい文字使いです。

江戸の納涼、とりわけ夕刻の「夕すずみ」の名所の

トップにあげられるのは両国橋です。毎年5月28日が川開きといわれ、この日から隅田川の夕涼みが始まります。旧暦の5月28日は、現在の暦の概ね7月半ばごろにあたり、まさに盛夏の一大年中行事であったといえるでしょう。両国橋を中心に、隅田川東岸も西岸も、櫛の歯のように夜店が立ち並び、人形芝居、猿の芸、軽業、足力按摩、屋台の様々な食べ物屋など、ありとあらゆる楽しみを堪能することができ、身分の高低にかかわらず人々が群集したと『東都歳事記』（天保9年=1838刊行）に記されています。

両国橋のほか、夕涼みの名所として、上野不忍池も有名でした。船を浮かべての涼みでは、小名木川も賑わったようです。

..... 「涼」の道具たち

昼間は、水撒きもやってきます。穴をあけた水桶を担ぎ、家ごとにその間口に水を撒いて料金を受け取る商売です。そして、人々は、うちわを使って自分専用



『東都歳事記』に描かれた水撒きの男



うちわ 右：上方風
左：江戸風

の風をおこしました。うちわに2つのタイプがあって、篠竹を丸いまま柄にして、先を細く裂き、上のほうだけに紙を貼ったのが江戸風、太い竹を平たく削って作った柄の上の骨部分全面に紙を貼ったのが上方風といわれますが、今では江戸風のうちわの柄と骨に適した篠竹が少なくなり、江戸風といわれるうちわを見かけることは、すくなくなりました。

また、すだれや葦戸よしどを使って風を通し、青々と茂る朝顔の葉で日差しをさえぎり、風とともに室内に入る蚊を蚊遣りかやを使って追い、夕刻ともなれば、先述の夕すずみ、というのが江戸庶民の盛夏の一日です。

軒に下げたつりしのぶのみずみずしい緑、虫籠の蛍のほのかな光も「涼」を演出しました。



のきすだれ



蚊やり

総合展示室 すずしく・あたたかく用品一覧
(各家に通年展示している長火鉢を除く)

船宿 相模屋	団扇・蚊やり・すだれ(透かし)・すだれ(ガマ芯の普通のタイプ)・同(材質 葦)・風鈴・吊りしのぶ
船宿 升田屋	てあぶり火鉢・団扇・軒すだれ(竹)・同(葦)・風鈴・蚊やり・虫かご・朝顔鉢植・掘割端の床机
長屋 秀次	団扇・浴衣・蚊やり・火鉢・炬燵・すだれ・風鈴・盛夏用組の着物
長屋 松次郎	手あぶり火鉢・水汲み桶と柄杓
長屋 おしづ	火鉢・炬燵・頭巾・すだれ・蚊やり・風鈴・虫籠・盛夏用組の着物・団扇・朝顔鉢植
長屋 大吉	すだれ・水汲み桶と柄杓・女綿入れ羽織
八百屋	ござ・綿入れはんてん・綿入れ着物
つき米屋	すだれ・蚊やり・飯つぐら
その他	太鼓のれん(日よけ)・虫売り屋台(スズムシ、ホタルなど)
長屋 政助	今戸焼の火鉢・団扇・綿入れ着物



葦戸

暖かく「暖」の道具たち

厳冬を暖かく過ごすのに使われた道具の代表は、まず炬燵でしょう。綿入れの衣服で上半身を保温し、足を炬燵に、という情景を描いた絵画が多く残されています。(1ページ メインの図版参照)

次が手あぶり火鉢でしょう。冬的生活用品として、総合展示室のほとんどの家に出てきます。通年でほとんどの家でみられる「長火鉢」は、暖をとるより湯沸かし器でした。もちろん冬には暖房具としても機能したことはいうまでもありませんが、盛夏でも火を絶やすことなく、つねに湯の使用に備えました。

各家の布団を積んだところをおおっている「枕屏風」も、就寝中の顔に隙間風すきまかぜが当たるのを防ぐ重要な「暖」の道具のひとつでした。



出土した手あぶり火鉢
(港区教育委員会)

季節のメリハリ

地球の温暖化が重要な環境問題となっている昨今です。江戸時代の冬は、今よりずっと寒さが厳しかったはずで、幼児が夜中に、屋外の共同便所まで行くのを待たず、縁側から小用をしたのが翌朝凍っているという情景を描いた文章が、江戸の文芸作品にみられます。こんなことがごく当たり前の日常であったことがみてとれます。これに対して、夏は、日中はそれなりに暑かったとしても、夕方ともなれば川面を渡ってくる風は十分に涼しく、昼間の暑さに対し、夕刻の快さは抜群のものとして感じられたことでしょう。夕涼みの季節の両国をはじめとする名所の賑わいは、現代の繁華街の季節を問わない「不夜城」ぶりとは本質を異にするものであったといえるでしょう。まさに人々が、自然の季節と共生し、その厳しさをのり越え、そのメリハリを楽しみながら生活していたことの証であるといえることができます。